

大塚 → 幕張
本郷
↓
天国

Otsuka → Makuharihongo → Heaven

ジャック

はじめに

この作品は十二年前に亡くなった友人『山ちゃん』と、六年前に亡くなった友人『竹内君』の魂の絶唱である。

はじめに

はじめに	3
Xファイル	6
地下鉄に乗って	7
スパード	9
ど根性がえる	10
吉原炎上	11
4 4 4 4 4 4 4 4 4 4	12
後ろの百太郎	13
ブルーハート	15
仄暗い水の底から	17
インビジブル	19
インビジブル2	20
ジュラシックパーク	21

CONTENTS

タイタニック	22
スカイハイ	26
怪人二十面相	27
サイン	28
スパイダーマン	29
天国と地獄	30
おぼけのQ太郎	31
花火	32
呪怨	33
牡丹燈籠	34
オトシモノ	35
回路	36
雲の中で散歩	37
終わりに	39

CONTENTS

Xファイル

「自分がこの世に最初から存在しないって考えた事あるか？」

これがいとも大塚に住んでいた山ちゃんの言っていた口癖。

「Xファイルみたいに、この体がブラックホールに投げ出されてこっばみじんになるなんて考えた事あるか？」

確かに子孫がなければ、何年かすればその存在すらなくなる。

「特攻は、行きの切符はあっても、帰りの切符はないからな」

これも山ちゃんがいつも語る言葉。

ひょっとして山ちゃんは、死ぬ直前、時代を遡ったのかもしれない。

地下鉄に乗って

山ちゃんが死んで十二年になる。

この事を携帯小説に書いたせいか、「おまえ、俺の事、書いただろ」と少し怒った顔で夢の中に出てきた。

時代錯誤な衣装を纏った人達がホームに所狭しと群れてもの凄い勢いで、暗いトンネルの中を走り貫けて行った。

その突破口の中に「人生五十年」と叫んでいた享年五十一歳の半分の歳の彼が、おおよそ八畳敷きの和室で話したのを覚えている。

「おまえ、おみやげちゃんと持って来たのか？ 山水園のビビンバ」
山ちゃんは、私の持ってきたおみやげを見て、

「しけた量だなあ」と

と笑った。

「だって急いでたから仕方ないじゃない」

「しょうがないなあ」と

山ちゃんの特技は、火種を揉み消す事。

「笑朗和楽」

墓に彫られた墓碑銘。

いかにも彼らしさが残る。